

卒業証書を受け取る教え子たちの晴れ姿を見ながら、彼女たちは4年間で何を学んでいったのだろうか、と考えていた。教員にとって4年の歳月はあまりに早くたつてしまうものである。社会に巣立つ学生たちに十分な知識を教授することができたのか思い返す瞬間でもある。

週刊 コラム

学生たちにとって一番の思い出は何といても友人と過ごした時間だろう。共に語り、悩みを分かち合った同級生はこれからも良き相談相手であるはずだ。課外活動で自分の気力と体力の限界に挑んだことも自信となつて、これから立ち上がる障壁を乗り越える力を与えてくれる。

授業の内容を思い出し、挙げる学生はいるだろうか。大学の講義の中で身に付くものと言ったら、自分で考え表現できたものだけだろう。自ら課題を見つけて、試行錯誤を繰り返すことで、思考プロセスや、課題と対峙する姿勢を身に付けられる。既存のものに疑問を投げかけること。批判的な考察から分析を試みる。自分の体を動かして検証すること。真理を追究する試みは、社会との接点にあることも私は伝えてきた。

一方で、学生生活で一番苦労したことに就職活動を挙げる新卒者は多いように思う。売り手市場という言葉も聞こえてはいる。神奈川県内の企業と学生のマッチングを進めるシヨップも開設されている。それでも、就職活動をしている学生一人ひとりが感じる苦痛

課題に真正面から

に変化はない。就職に役に立つ授業、資格といったものが着目される傾向は強まっている。学問に無駄なものは何ひとつなく、資格が役立つときも多と思う。働くことの意義を考える重要性に異論はない。しかし、今小学生のころから職業選択を意識させる必要性がはたしてあるのだろうか。

私が高校生の時、自分が大学を卒業するころに2000年問題なるものが起きて、多くの新卒者がシステムエンジニアとして採用されることなど想像できなかった。外資系企業がこれほど身近になることも、多種多様なコンサルティング業務が求められる時代になる

ことも、教えられることはなかった。5年先の社会がどのような仕事をつくり出しているのか予測不可能な部分も多い中で、10代の子供たちに就職を意識させる必要はない。

むしろ興味を持つテーマを見つけていくことが先決だ。環境問題に強い関心を持つ子供たちの中から、生態系の研究者や、社会的責任を重視する企業人、自然との共生をライフワークにする人材などが育つことだろう。

地球を笑顔にしたい。世界に貢献したい。そうした自分の生きる信念を持っていれば、どんな社会の変動があろうと、輝く存在であり続ける。

この春新たな一歩を踏み出す人々には、テクニカルな解決方法ではなく、課題に真正面から取り組む心意気を大事にしてほしい。



東京純心女子大講師
早大大学院研究員
牧島可憐